

氏名(本籍)	佐藤郁之(新潟県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第1937号		
学位授与年月日	平成15年6月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	哲学・思想研究科		
学位論文題目	宗教言語と宮沢賢治テキスト - 宗教とことばの創造性 -		
主査	筑波大学教授	文学博士	山中 弘
副査	筑波大学助教授	博士(文学)	塩尻和子
副査	筑波大学助教授	文学博士	伊藤 益
副査	京都府立医科大学教授	博士(文学)	棚次正和

論文の内容の要旨

本論文は、「宗教言語」という近年注目を浴びている問題領域を視野に入れた観点に立って「宮沢賢治テキスト」を読み解くことを企図した論考である。本論文の構成は、前半部においてメタファー論や象徴論を経由して宗教言語に関する基礎的な議論を展開しながら、真偽や指示の問題に焦点を絞って宗教言語の固有性を浮き彫りにし、後半部においてはその宗教言語固有の指示の次元を見据えた地点から賢治テキストの読解に取り組むという形を取っている。

まず序において、文学的虚構との距離として宗教言語を捉えるという著者の基本認識に関して導入的な論述を行ない、宗教言語を論ずる際に象徴やメタファーや神話に関する議論を経由することが述べられるとともに、賢治研究の歴史的経緯を概観しつつ、伝記的生の賢治からは独立した賢治テキストに着眼して、宗教言語の視点から賢治テキストの読解を試みるという本論文で主張される議論の大筋が素描される。

第一章では、言語が迂回であるとともに媒介でもあるという言語一般の特質を踏まえて、宗教的資料としての言語も一方で距離を生み出すと同時に、他方で象徴的な媒介をなすものであることを確認し、宗教現象における言語媒介性を押さえながら、宗教言語が他の仕方（たとえば、日常言語や科学言語や文学言語など）では言い得ないものを言おうとする言語運動であるという認識に著者が立つことが改めて表明される。

第二章では、神話理解における字義通りの意味と象徴表現についての論究が展開される。「神話は字義通りに理解されるか」という問題意識から出発して、ジョセフ・キャンベルやノースロップ・フライの神話解釈が必ずしも神話の真の理解に成功しておらず、むしろパウル・ティリッヒやミルチア・エリアーデの象徴解釈に依拠して、究極的なものが表現された象徴言語（神話）が存在の深みの次元に与っていることや、神話の出来事の時間性が歴史の時間性に割り込んで人間存在を根本的に根拠付けていることを洞察することを通して、神話の非虚構性を弁明することが試みられている。

第三章は、メタファー論を宗教言語や神話の理解に適用することの妥当性に関する検討に当てられている。ジョン・ヒックやジョセフ・キャンベルやポール・ブロックルマンの神話理解は、いずれも神話は字義通りには真ではないと見て、その認知的側面を軽視するものであるが、著者は彼らの神話弁護が科学的世界像の

偏狭さを意識しながらも、かえって近代の狭量な事実観念に囚われて、神話の事実性から分離してしまったことを指摘し、また神話の語る現実が文学的メタファーを捉える地平よりも深い現実に関わることに言及している。

第四章では、J.M. ソスキースによるメタファーを中心とした宗教言語論を概観して、その最終的な論点がメタファーの認知的可能性の有無にあったことを確認する。ソスキースはメタファーの代替理論や感情理論に批判的な検討を加えた上で、モンロー・ピアズリーやマックス・ブラックの見解を踏み台にして、メタファーは他の表現に翻訳不能であり、新たな意味を創出すると見る付加理論を提出するが、著者の理解に従えば、ソスキースの目論見は、科学であれ宗教であれ、発見的思考そのものがメタファーやモデルに依存していることを示すことにあった。そして、この宗教言語による現実描写の問題が、単語や文とテキスト（言説）という言語現象のサイズの違いの問題を孕んでいることが示唆される。

第五章は、宗教言語として考察する対象を「メタファーからテキストへ」と拡張することによって、上述した宗教言語に関する議論で扱った基本視点を賢治テキストの解釈へと繋げるための論考である。ソスキースのメタファー論をテキスト論へと延長する際に著者が訴えたのは、写像した可能世界に合わせて現実世界を解釈する働きを「～として語る」メタファーの中に捉えたサミュエル・レヴィンの写像（マッピング）論である。このレヴィンの写像論と、作者の意図から独立したテキストの意味論的自律を基礎に置くリクルのテキスト論や非明示的指示の次元を射程に入れた彼の詩的言語論を援用し、経験的な検証と反証に従う真理概念への批判を加えつつ、著者は宗教言語が独自の指示次元を有しており、したがってそれが世界を現実的に語っていることを論じている。

第六章では、上来の議論を受けて、宗教言語の具体例として賢治テキストを取り上げ、たんに法華経信仰流布の方便に止まらない賢治自身の法華文学観に基づいて、『春と修羅』序や『注文の多い料理店』序やその広告ちらしなどに登場する「心象スケッチ」が、けっして想像世界の描写ではなく現実世界（日常世界に重なり合いながら、その根底に開かれる根源的な現実世界）について事実その通りの記述であることを論究している。さらに、「農民芸術概論綱要」や童話「竜と詩人」などの言葉を引用しつつ、賢治の詩や童話が文学的虚構からの距離と日常的事実性からの距離という二重の距離として特徴づけられること、また心象スケッチが万人の心の深部で共通したものであるという賢治の確信に触れて、宇宙感情の中で風や雲との交流で得られた「まこと」の言葉によってテキストが産出されたことを説いている。

第七章では、賢治テキストと文学的虚構との距離に関して、さらに著者の見解を展開し、賢治の先行研究における主要な争点を整理しながら、心象スケッチが作品産出の方法であると同時に、根源的な世界を読者に開示してそこへ読者を誘う宗教的な言語行為であることを論じている。とりわけ、賢治テキストが指示する次元を「まこと」の次元と見なして、その「まこと」の世界が妙法が実成する法華経の世界に通底していることが示唆される。心象スケッチは一つの文学的形式をとってはいるが、それが語るのは虚偽の世界ではなく、日常世界よりも根源的な現実の層であるとするのが、歴史や宗教の位置の変換を目指した賢治の企図や特異な心象体験から判断して妥当であることが論じられ、執拗な推敲作業がことばと体験が一致する心象体験の反復的な回復に他ならないことが指摘される。

第八章では、心象スケッチと自然との結びつきに着目することによって、賢治における宗教言語の営みを象徴としての自然の開示をテキスト世界の開示へと移し変える作業と見なすことができることを論究している。象徴としての自然を捉える際に、著者はエリアーデの象徴論を下敷きにして、自然の存在それ自身が語り出す言葉に聴き従い、その自然から贈られた言葉をそのリアルな通りにテキストの言葉へと書き写す行為が言葉の力への信頼に基づくものであり、その信頼の根拠が自然の象徴性に求められること、また自然の語る言葉とテキストの言葉とが一つに重なり合う場所こそが心象スケッチが発生した場所であることを説いている。

第九章では、賢治テキストにおける言葉の根源の問題についてさらに考察を掘り下げ、チャールズ・ロングの解釈学における「新たなアーケイズム」や天沢退二郎の言う「語りのオリジン」の考え方を踏まえながら、根源への遡行の方法を問い、とくに賢治テキストの徹底した解読を企てた天沢が作品の彼方として無限遠点に置いた根源的なものを宗教的な文脈の中で把握し直すことを試みている。著者の視点からは、天沢が指摘した「語りの非人称性」、つまり根源への遡行作業において作者が匿名性へ解体していくことは、そこにおいて心の深部で万人に共通するような言葉が作品として開かれる可能性が生まれることに他ならず、むしろその事態が「詩人の死」と同時に「宗教的人間の死と再生」として理解できるものであることが論じられる。のみならず、解釈行為の中ではそれが作品を人称性へと引き戻す運動を伴うことによって、根源との断絶と根源への遡行という終わりなき往還運動として捉え返されることが示される。

「むすび」においては、宗教言語がいかなる仕方でも意味であるのかを再び問い直し、宗教言語を文学的虚構から区別してその指示の真理性を確保することや、宗教言語が有する根源的創造性などの問題に言及するが、本研究を終えたこの時点においても、著者は文学テキストと宗教言語との異同の問題が必ずしも解決されないまま残されていることを正直に述べている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、「宗教言語」の視点から「宮沢賢治テキスト」の読解を試みた極めて意欲的な論考である。本論文が前半部の宗教言語論と後半部の賢治テキスト論という二部構成を取る中で、メタファーからテキストへと議論を拡張することによって、前半の宗教言語論と後半の賢治テキスト論を可能な限り有機的に結合することを試みた著者の格闘の跡が窺われ、自己の立脚点を最後まで堅持しながら考察対象に一途に向かって行った研究姿勢は、大いに評価できるものである。前半の議論と後半の議論とのバランスの点では多少均衡を欠いたところはあるにせよ、宗教言語の視点から賢治テキストを読み解くという著者が依拠した立脚点の斬新さは、膨大な数に上る賢治研究の中でも特筆に値するものと言えるであろう。宗教言語の視点から賢治テキストを読み解く際に著者が採用した戦術は、第一に宗教言語の特質を文学的虚構からの距離と日常的事実性からの距離という二重の距離として陰画的に浮き彫りにしたことであり、第二に賢治テキストを作者自身の個人的意図や伝記的生涯から切り離して意味論的に自律したものとして取り扱ったことである。こうした枝葉を削ぎ落として本体の輪郭線を浮上させる戦術が、宗教言語と賢治テキストという本論文の二つの焦点の結像をよりいっそう明確なものにし、それらが交差する場を開くことを可能にしたと言えるであろう。

本論文で示された新しい企図や重要な知見を改めて整理すれば、(1)「宗教言語」を論ずる視点に立って「賢治テキスト」の読解を試みたこと、(2)賢治という作者の意図や伝記的生涯の脈絡から意味論的に自律したものとして賢治テキストの読解を試みたこと、(3)真か偽かという問題に徹底して関心を持ち続け、メタファーや象徴に対する考察を経由することによって宗教言語に固有の指示の次元があり認知的機能があることを論じたこと、(4)したがって神話などの宗教言語が字義通りの事実として読まれるべきことの根拠を探究したこと、(5)日常世界や科学的世界など通常の現実世界よりもさらに根源的な現実世界が存在することを、賢治の心象スケッチ論を手掛かりにして示したこと、などを挙げることができる。また、本論文全体を通して論述の仕方が奇を衒わず極めて平明であり、それゆえ最後まで読者を引きつけて読ませる文章力も評価できる点である。

しかしながら、本論文に瑕瑾がないわけではない。いくつか問題点を列挙すれば、(1)著者の努力にもかかわらず、前半の宗教言語に関する議論が後半の賢治テキストに関する議論の中に必ずしも有効な仕方では取り込まれていないこと、(2)賢治テキストの分析や言及が特定の少数の事例に集中しており、多彩な作品集合体としての賢治テキストに対する目配りに欠け、具体的な作品分析が乏しいこと、(3)言語現象全体に

おける宗教言語の位置づけに関する議論がいまだ不十分で、文学言語（詩的言語）や日常言語など他の言語現象との差異が必ずしも明確ではなく、したがって文学言語との異同の問題が整理し切れていないこと、(4) 実在的世界を人間に媒介するという著者の象徴理解はやや平面的であり、象徴特有の奥行きのある構造を洞察する考察に欠けていること、(5) 賢治個人の法華経信仰を賢治テキストから切り離すという戦術は頷けるが、賢治には最重要の経典であったはずの法華経に対する考察が十分ではなく、また賢治テキストを捉えるのと同じ宗教言語の視点からの分析も法華経に対しては行われていないこと、(6) 賢治の詩や童話が指示する「まこと」の世界について、実在・聖なるもの・根源的なものなど他の言葉に置き換えているだけで、その真に現実的な世界の内実が陰影のある言葉で把握されていない恨みがあることなどである。

以上のようなお検討すべき点があるとはいえ、全体として見れば、本論文は宗教言語と賢治テキストに関する議論の統合化を目指した斬新な企図の下に遂行された研究成果として、宗教研究と賢治研究との双方に寄与するところが大きいと評価される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。